

源氏物語における

形容詞 + 接尾語ゲについて

藤 松 紀 子

源氏物語では、たとえばウラメシという形容詞を基本にして、モノウラメシ、ウラメシゲナリ、モノウラメシゲナリという四層を区別し、情況に応じてそれを使い分けたということを大野晋先生が「日本語をさかのぼる」の中で指摘しておられる。それを読んで私は形容詞に接頭語モノや接尾語ゲがついた形に興味を覚え、自分なりに用例の傾向や特色などの考察を試みた。

用例を引くにあたって、テキストは小学館の「日本古典文学全集・源氏物語」(1)と(6)を使用し、池田亀鑑氏の「源氏物語大成・索引篇」に出ている形に倣った。なお形容詞 + 接尾語ゲに関しては、接尾語ゲがついて形容動詞になっているものほかに、さらに接尾語「さ」を伴って名詞化された「かなしげさ」等や、「なし」を伴った「たのもしげなし」等の形も用例として引いた。

また便宜上、源氏物語を第一部、第二部、第三部に分けたが、第一部は執筆順序の問題があり、二系統の物語が組み合わさり、構成が複雑なので、従来言い慣わされているように、それぞれの系統の中で、最も重要な女主人公の呼び名による紫上系と玉鬘系に分けた。以後、紫上系をAグループ、玉鬘系をBグループ、第二部をCグループ第三部をDグループと呼ぶことにする。

*
まず源氏物語の中に見られる形容詞 + 接尾語ゲ、接頭語モノ + 形容詞、接頭語モノ + 形容詞 + 接尾語ゲの用例を比較してみる。(資料参照) 各用例の総数・異なり語数・紫式部の作品にしかない語(本稿では万葉集・竹取物語・伊勢物語・古今集・土佐日記・後撰和歌集・蜻蛉日記・枕草子・紫式部日記・更級日記・大鏡・方丈記・徒然草・宇津保物語・落窪物語の一五作品の用例と比較したときに源氏物語だけ、あるいは源氏物語と紫式部日記だけに見られる語のことを紫式部の作品にしかない語と呼ぶことにする) 各グループごとの用例数・使用範囲等を調べ整理したのが表1である。

接頭語モノ + 形容詞の用例は、紫式部の作品にしか見られない語が、異なり語数三三のうち一四と多く見られる。源氏物語全体を四グループに分けた場合、各グループごとに用例数の差があまりなく、使用範囲が三グループ以上のもものが半分を占めているように、作品全体に用例が平均してあるようだが、形容詞 + 接尾語ゲの形に比べると、接頭語モノ + 形容詞は三〇〇例三種と用例数、異なり語数はそれ程多くない。

接頭語モノ + 形容詞 + 接尾語ゲの形は、接頭語モノだけ、あるいは

表 1

		形容詞+接尾語ゲ	接頭語モノ+形容詞	接頭語モノ+形容詞 +接尾語ゲ
用例総数		1192 例	300 例	48 例
異なり語数		181 語	33 語	14 語
紫式部の作品に し か ない 語		96 語	14 語	9 語
用 例 を 含 む 文	地の文	865 (72.6%)	194 (64.7%)	32 (66.7%)
	会話文	210 (17.6%)	68 (22.7%)	13 (27.1%)
	心内語文	106 (8.9%)	32 (10.7%)	2 (4.2%)
	消息文	10 (0.8%)	5 (1.7%)	1 (2.1%)
	歌	1 (0.1%)	1 (0.3%)	0
Aグループ		289例 77語	90例 23語	8例 7語
Bグループ		215例 82語	56例 26語	15例 7語
Cグループ		242例 66語	61例 16語	8例 4語
Dグループ		446例 114語	93例 20語	17例 9語
使 用 範 囲	4グループ	25語 (13.8%)	12語 (36.4%)	1語 (7.1%)
	3グループ	23語 (12.7%)	6語 (18.2%)	4語 (28.6%)
	2グループ	30語 (16.6%)	4語 (12.1%)	2語 (14.3%)
	1グループ	103語 (56.9%)	11語 (33.3%)	7語 (50.0%)
		→Aグループ 18語 Bグループ 18語 Cグループ 20語 Dグループ 47語		

は接尾語ゲだけがついた形に比べて、用例数も異なり語数もずっと少なく、紫式部の作品にしか見られない語や使用範囲の狭いものが多いようである。

形容詞+接尾語ゲは用例数一一九二例、異なり語数一八一語と用例数も異なり語数も多く、また紫式部の作品にしか見られない語も九六語と多い。使用範囲を見ると、接頭語モノ+形容詞が三グループ以上に見られるものが五〇%以上もあり、源氏物語において片寄りなく、あちらこちらに使われているのに対し、形容詞+接尾語ゲは一グループにしか用例のない語が六割近くもあるなど、使用範囲の片寄りが見られる。形容詞+接尾語ゲについてももう少し細かく整理したのが表2である。

形容詞+接尾語ゲは表1からわかるように地の文に用例が多いけれども、各グループごとに比較すると(1)のように、Dグループでは地の文の用例の占める割合が少なくなっている。紫式部の作品にしか見られない語は、一八一語のうち九六語とかなり多いが、(3)のように使用範囲が狭いものが多くなっている。紫式部の作品にしかない語の中で、接尾語ゲを取り除いた形容詞の形も、紫式部の作品にしかない語は一五語(あなづりにくげ・あらましげ・いろめかしげ・

表 2

(1) 用例のある文の種類

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
地の文	237 (82.0%)	153 (71.2%)	185 (76.4%)	290 (65.0%)
会話文	31 (10.7%)	51 (23.7%)	43 (17.8%)	85 (19.1%)
心内語文	18 (6.2%)	10 (4.7%)	12 (5.0%)	66 (14.8%)
消息文・歌	3 (1.0%)	1 (0.4%)	2 (0.8%)	5 (1.1%)

(2) 紫式部の作品にしかない語

	地の文	会話文	心内語文	消息文・歌	計
Aグループ	22	4	5	1	32 (19.5%)
Bグループ	20	2	0	1	23 (14.0%)
Cグループ	17	8	1	0	26 (15.9%)
Dグループ	50	19	14	0	83 (50.6%)
計	109 (66.5%)	33 (20.1%)	20 (12.2%)	2 (1.2%)	164

(3)

使用範囲	異なり語数	紫式部の作品にしかない語
4グループ	25	0 (0%)
3グループ	23	5 (21.7%)
2グループ	30	16 (53.3%)
1グループ	103	75 (72.8%)

かがやかしげ、かけかけしげ、かよわげ、こころあさげ、すぐしがたげ、そしらはしげ、そぞろさむげ、ただよはしげ、なぐさめがたげ、なまうらめしげ、なまにくげ、にくみがたげ)と少くなく、接尾語ゲがつくことによって、紫式部の作品にしかない語になっていくものが多い。

各グループごとに用例を見ると、Dグループに多く、使用範囲の狭い語や紫式部の作品にしかない語も多い。Dグループは、用例数も一番多いが、単に用例が多いだけでなく、異なり語数や他のグループにない語や紫式部の作品にしかない語も多いのには注目したい。

*

ここでは接頭語モノ+形容詞+接尾語ゲの用例も含め、形容詞に接尾語ゲのついた形一二四〇例について、他の作品と比較してみる。比較した作品は、注²、注³、注⁴、注⁵、注⁶、竹取物語・宇津保物語・落窪物語・枕草子・紫式部日記の五つで、それぞれの用例数・異なり語数・用例がある文の種類・作品独自の語・描写の対象について整理したのが表3である。

他の作品の用例と比較してわかることは次のようなことである。

源氏物語は本文が一番長いので、形容詞に接尾語ゲのついた形の用例も一番多く、作品独自の語も他の作品よりかなり種類が多い。

表 3

		竹取物語	宇津保物語	落窪物語	枕草子	紫式部日記	源氏物語
用例総数		7	257	163	180	50	1240
異なり語数		7	52	38	57	22	195
作品独自の語		0	2	3	6	0	105
用例を含む文	地の文	3	128	103	177	47	897
	会話文	3	101	48	3	3	223
	心内語文	0	4	3	0	0	108
	消息文	1	17	9	0	0	11
	歌	0	3	0	0	0	1
	その他	0	4	0	0	0	0
描写の対象	人物描写	4 (57.1%)	180 (70%)	123 (75.5%)	89 (49.4%)	46 (92%)	990 (79.8%)
	人物以外の描写	3 (42.9%)	77 (30%)	40 (24.5%)	91 (50.6%)	4 (8%)	250 (20.2%)

* 作品独自の語は異なり語数を記してある。

物語は日記や随筆に比べて、会話文中の用例が多いが、源氏物語は竹取物語・宇津保物語・落窪物語に比べると会話文中の用例の割合が少なく、地の文中の用例の占める割合が高い。描写の対象としては、人物描写に使われている用例が多い。

源氏物語と同作者の作品である紫式部日記は、用例が五〇例と少ない割には異なり語数が二二と多い。他の作品の用例の中には、源氏物語の中に見られない語があるけれども（竹取物語一・宇津保物語六・落窪物語八・枕草子一一）、紫式部日記にある用例はすべて源氏物語の中に見出されるし、紫式部日記と源氏物語には用例があるが、前述の一四作品には用例がないという語が四語あるなど、形容詞に接尾語ゲがついた形の使い方を見ただけでも、同作者としての類似性が伺える。

*

今までは用例の数の上からだけ見てきたが、これからは話の内容等も合わせて考察していくことにする。

まず形容詞＋接尾語ゲの用例がどういふ場面に使用されているのかを見てみたい。ある一つの場面を考えた場合に、形容詞＋接尾語ゲのことばによって描写されているものと、それを見て描写しているものがあるが、ここではその両者の位置から場面というものを考えてみることにする。たとえば、

（軒端菰）髪はいとふさやかにて、長くはあらねど下り端、肩の
ほどこよげに、すべていとねぢけたる所なく、をかしげなる人
と（源氏には）見えたり。（「空蟬」一九四ページ）

という文章では、「きよげ」「をかしげ」は軒端菰についての描写であり、光源氏の目を通して軒端菰が描かれているが、こういう場

表 4

(1) 地の文

			Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	計
イ	1	a	65	40	45	68	218
		b	66	76	81	107	330
	2	c	37	9	22	44	112
		d	2	1	2	3	8
		e	0	0	0	0	0
ロ			73	35	40	81	229
計			243	161	190	303	897

(2) 会話文・心内語文等

			Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	計
イ	1	a	3	3	3	7	16
		b	7	12	13	22	54
	2	c	27	29	32	105	193
		d	14	19	5	20	58
		e	2	6	7	7	22
			53	69	60	161	343

合、軒端菽を「描写対象物」、光源氏を「視点となっている人物」と呼ぶことにする。

場面を次のように大きくイとロの二つに分け、イをさらに細かく分類してみる。

イ 視点となっている人物が登場人物である例

一、描写対象物と視点となっている人物が同場面に位置している例

a、視覚をあらわす動詞「見る」等や、聴覚をあらわす動詞「聞く」等が形容詞に接尾語ゲがついた形と同文、あるいは前後の文に見出せるもの

b、「見る」「聞く」等の動詞が伴わないが前後の関係から、視点となっている人物と描写対象物が同場面に位置しているとわかるもの

二、描写対象物と視点となっている人物が、空間的、時間的に離れた場面に位置している例

c、描写対象物と視点となっている人物が、空間的に離れているもの

d、描写対象物を視点となっている人物の過去の体験によって描写しているもの

e、描写対象物を視点となっている人物の推量によって描写しているもの

ロ 視点となっている人物が登場人物には見あたらない例

地の文と地の文以外の文の二グループに分けそれぞれの用例を前述の項目に分類してみたのが表4である。

地の文では、a、bのように描写対象物と視点となっている人物が

同場面に位置して、直接、描写対象物を目にしたり、耳にしたりしている場合に、形容詞＋接尾語ゲが使われていることが多い。これに対して心内語文、会話文等では、視点となっている人物と描写対象物が空間的、時間的に離れている場面の用例が多くなっている。

具体的に語をあげてみると、「らうたげ」「うつくしげ」「をかしげ」の語は、地の文の多く見られるが、会話文・心内語文では用例が少なく、特に会話文では相手を前にして、その人物を「らうたげ」「うつくしげ」などと言うことはない。また会話文・心内語文等には「うとましげ」「おそろしげ」「なやましげ」「たのもしげなし」などのように、あまり好ましくない意味の形容詞に接尾語ゲのついた形が多く見られる。

接尾語ゲが地の文で使われる場合は、外から見える様子を単にあらわしているにすぎない例がほとんどであるが、主観が入る会話文・心内語文中で接尾語ゲが使われる場合、外からはそのように見えるが、本質はそうではないのかという裏の意味あいが強くなり、接尾語ゲのついていない形容詞より一段低い感じを表わしたり、好ましくない意味を弱めるために接尾語ゲが使われることが多いようである。

こうして分類してみると、地の文とそれ以外の文では、形容詞＋接尾語ゲの使われている場面に差があり、同じ語であっても、地の文と会話文・心内語文などでは、ことばのニュアンスが多少異なることがあるということがわかる。

*

地の文における形容詞＋接尾語ゲの描写対象物と視点となっている人物についてもう少し述べてみたい。

まず描写対象物となっている人物に片寄りが見られるかどうか調べてみると、描写の対象となっている人物は、帝から隨身や下仕えに至るまでさまざまな階級の人物が挙げられる。しかし用例が多いのは、やはり物語で重要な役割を果たしている人物で、用例数が二〇以上の人物を抜き出してみると

紫上(四四例) 薫(四三例) 光源氏(四一例) 中の君(三九例) 女三の宮(三三例) 浮舟(二九例) 玉鬘(二六例) 夕霧(二一例) 大君(二一例) 葵上(二〇例)

というように物語の中心人物が出揃ってしまう。

源氏物語の主要な人物(定義がむずかしいので、テキストとして使用した源氏物語(6)の巻末にある源氏物語主要人物解説に名前が出ている人物五八名をここでは主要人物とした)について整理すると、取り上げられている人物が、女性の方が多いこともあるけれども、男性一七六例、女性三五七例と男性の倍ちかく女性が形容詞＋接尾語ゲによる描写の対象になっている。(表5参照)

次に視点となっている人物を調べてみたが、描写の対象となっている人物と同様、帝から供人まで、さまざまな人物が挙げられる。このことから、源氏物語はいろいろな人物の視点で物を見て描いていることがわかる。

しかし、描写の対象となっている人物に比べると、視点となっている人物は人物のバラエティーがなく、用例数に片寄りが見られる。試みに用例数の多い順に一〇人挙げてみると、

語り手(二二九例) 光源氏(二二一例) 薫(八一例) 夕霧(四〇例) 匂宮(三七例) 頭中将(二四例) 中将の君(二二例) 明石の君(二二例)

表 5 主要な人物描写の対象

人物	総数	A	B	C	D	対象	総数	A	B	C	D
明石入道	三	三				葵の上	二〇	一九	一		
宇治の阿闍梨						明石の尼君	三	一			
右大臣						明石の君	〇	三			
薫	四			五	三	明石の中宮	一	五			
柏木	一〇			九	八	秋好中宮	一	四			
桐壺院	二	二				朝顔の姫君	一	一			
今上帝						一条御息所	四	四			
紅梅						浮舟	二				
左近少将	四					空蟬	四		六	四	
左大臣	二	二				近江の君	六				
式部卿宮	二	二				大君(玉鬘の子)	三				
朱雀院	四	二		二		大君	二				
中将	三					大宮	五	四			
頭中将	一	五				落葉宮	五		一		
時方	二			三		小野の妹尼	五			五	
匂宮	一					朧月夜の君	六				
八の宮	六					女一の宮	二				
光源氏	四	二		一		女三の宮	三				
鬚黒	一	四		五		雲居雁	一				
常陸介	一					源典侍	二				
蛭宮	二					弘徽殿大后	二				
夕霧	二	六		二		弘徽殿女御	六	三			
横川僧都	一					待従の君	二				
冷泉院	四	三	一	九	一	末摘花	一	三			

頭中将	一四	七	七	一	一	四	八
時方	三七						
匂宮	四						
八の宮	二二						
光源氏	二一	九二	六五	六四	三七		
鬚黒	八		七	一	四		
常陸介	三				三		
蜚宮	四〇	五	六	二五			
夕霧	二	五			二		
横川僧都	五				四		
冷泉院					三		
計	一一〇	八五	一一一	一一一	一一三		
落葉宮							四
小野の妹尼							八
隴月夜の君	一八						
女一の宮							
女三の宮							
雲居雁	二						
源典侍							
弘徽殿大后	二						
弘徽殿女御							
待従の君	一						
末摘花	三						
玉鬘	七						
中将の君	二						
中の君	一八						
花散里							
藤壺中宮	四						
弁の尼							
真木柱	一						
紫の上	一						
夕顔	二						
六条御息所	二						
計	一一	一五	二二	二二	二二	六	六一

というように、語り手、光源氏、薫の用例が圧倒的に多くなっている。

男性と女性を比べると、描写の対象となっている人物とは反対

に、男性の方が多くなっている。接尾語ゲが使われている箇所についてだけしか考察していませんので、はっきりしたことは言えないが、紫式部という女性の作者が、光源氏や薫といった男性の目を通して

女性を描写していることが多いのは興味深い。

視点となっている人物が女性である例は、男性に比べて少ないけれども、主な視点となっている人物の用例数（表6参照）をグループごと比べてみると、

Aグループ	男性二〇例	女性二一例
Bグループ	男性八五例	女性一五例
Cグループ	男性一一例	女性二二例
Dグループ	男性一三三例	女性六一例

というように、Aグループでは、男性と女性の用例の比が大体六対一であるが、Dグループでは大体二対一と、視点となっている人物が女性である用例の占める割合が増えてきている。これは、最初は単に人形のような存在でしかなかった女性登場人物が、次第に男性登場人物と同様に物を見、描写する視点を持つ存在へ変わっていったことのあらわれではないだろうか。

*

以上考察は前述のように、源氏物語を四つのグループに分けて行なった。第一部の紫上系と玉鬘系では、ほとんど相違がなく、接頭語モノ＋形容詞や形容詞＋接尾語ゲの用例数が、玉鬘系は紫上系よりも少ないのに異なり語数は多く、玉鬘系は紫上系よりも多少語集が豊富なのではないかと程度の違いしか見出されなかった。

第一部、第二部、第三部での用例を比較してみると、第三部は異なり語数が多く、他のグループに用例のない語や紫式部の作品にしか見られない語が多いこと、視点となっている女性の用例が多くなっているという特色が見られる。源氏物語を内容の上から見ると、第三部は非常に近代小説的な面を持っていて、第一部などと比べると

と作者の成長の過程が伺えるが、ことばの用法も話の筋と密接した関係にあって、第三部では語の種類も豊富になっているのではないだろうか。

また形容詞＋接尾語ゲは源氏物語にしかない語が多いが、それらは使用範囲が狭く、一グループにしか見られない語が多い。特に第三部にしか使われていない語が多いことから、形容詞＋接尾語ゲという形は、作品が執筆されている最中に、必要に応じて新しい形が生まれていったのではないかと思われる。

紫上系と玉鬘系では、さほど違いが見られないのに、第一部、第二部、第三部と分けてみると、相違が見られることは興味深いことである。

今回は資料の羅列で終わってしまったが、これらの資料をこのまま眠らせておかないで、草子地や人物論等の問題を考える時に、活用していきたいと思う。

- 注1 大野晋「日本語をさかのぼる」岩波新書
- 注2 山田忠雄「竹取物語総索引」武蔵野書院
- 注3 宇津保物語研究会「宇津保物語・本文と索引・索引編」笠間書院
- 注4 「落窪物語」（日本古典文学大系）岩波書店
- 注5 「枕草子」（日本古典文学大系）岩波書店
- 注6 「紫式部日記」（日本古典文学大系）岩波書店

資料

*印↓一六作品の中で源氏物語だけに見られる語

	A	A	B		B	A	A	B	B	A	A	B	B	A	A	B	B		B	B
D	D	D	D	D	D	D	C	C	B	D	D	D	D	D				D	D	D

こころづきなげ	こころせげ	こころすげ	こころぐるしげ	こころあさげ	こちなげ	けどほげ	けうとげ	さ	くるしげ	くやしげ	くまなげ	くちをしげ	くちおもげ	くしいたげ	きよげ	なし	きたなげ	きこえつたえにくげ	ききすぐしがたげ	かるげ	かよわげ	かへりなまほしげ	かなしげ	かどかどしげ	かたはらいたげ	かたらひがたげ
---------	-------	-------	---------	--------	------	------	------	---	------	------	------	-------	-------	-------	-----	----	------	-----------	----------	-----	------	----------	------	--------	---------	---------

* * * * * * * * * * * * * *

1	1	1	21	1	1	1	2	1	45	2	1	1	1	1	65	4	3	1	1	2	1	1	6	1	1	1
---	---	---	----	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

1	9								6					1	11				1							
---	---	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	---	----	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--

(1) 1

1									1																	
---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1				1		4		1	1	11	2	1								1	1		1		1	
---	--	--	--	---	--	---	--	---	---	----	---	---	--	--	--	--	--	--	--	---	---	--	---	--	---	--

2	1							2							2	1										
---	---	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	---	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

2

2									12						7											4
---	--	--	--	--	--	--	--	--	----	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

1										1		1														
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1		4		1	1	1			13						26	1	1	1						1		1
---	--	---	--	---	---	---	--	--	----	--	--	--	--	--	----	---	---	---	--	--	--	--	--	---	--	---

1		1							5						4		1						1	1		
---	--	---	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	---	--	--	--	--	--	---	---	--	--

						1	1								2											
--	--	--	--	--	--	---	---	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1

1	2								8						47	1	4								4	
---	---	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	----	---	---	--	--	--	--	--	--	--	---	--

1									7						45											
---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

		2							5						37		6								1	
--	--	---	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	----	--	---	--	--	--	--	--	--	--	---	--

									1						4											
--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

A	B	A	A	B	B	A	B	A	A	A			B	A	B	C	
	D	D	C	D	D	D	D	C	D	D	D	C	D	C	D	D	D
すくしがたげ	しふねげ	しおげ	しのびがたげ	しどけなげ	さわがしげ	さむげ	さぶらひにくげ	さびしげ	さかなげ	さかしげ	さうぎうしげ	このましげ	ことごとしげ	こちなげ	こころをさなげ	こころよわげ	こころよげ
*	*	*	*	*		*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
1	1	1	2	4	2	9	1	5	1	3	2	6	4	1	2	1	1
			1	1		1		1				3	1				
(1)											2						
						3		1	1						2	1	2
	1			1													1
								1									
					2			1	1						1		3
																	1
																	1
	1	1				5	1	1	1	3	2	1	1		2		4
							1	1									(1)
																	2
																	1
																	1
																	8
																	1
																	1
																	4
																	1
																	1
																	1
																	1

